

(インターン生作成記事)

【KEKのひと】 「バッハと素粒子を愛する研究者」 菊谷英司さん

KEKの評価・調査室と史料室に籍をおくシニアフォロワーの菊谷英司さんは、クラシックが好きで、なかでもバッハが最も好きだそうです。ほかの音楽家ではなくバッハの曲が好きな理由や研究者を志した動機、経緯などについて聞きました。

—なぜバッハが好きなのですか。

「ひとことで言うと理屈っぽいからです。なぜ理屈っぽいのかというと、バッハはよく対位法という技法で作曲しているからです。その構造は合唱でいうところの輪唱と似ており、それが物理の理論の枠組みを組み立てているときと似ているのです。そのため、バッハの曲を聴いていると頭がすっきりしてきます」

—ほかの音楽家は対位法を用いていないのですか。

「用いています。しかし、バッハ以上に考えられた曲を作った音楽家はいません。個人的にバッハの曲は音質が悪くても気にならず、音が直接体に入ってくる感覚になります」

—素粒子の研究に興味をもったのはいつごろですか。

「物理自体に興味を持ったのは小学生の頃です。毎日放送される科学番組を楽しみにしていた記憶があります。素粒子に興味を持ったのが中学生の頃です。そのときは、ものを極限まで壊していったらどうなるのだろうという直感的な好奇心からでした」

—その後、どのようにしてこのKEKに就職したのですか。

「高校生の頃、日本一物理を深く学べる大学は京都大学だと先生に勧められ、京都大学へ進学しました。その後、大学院へ進学する際に東京大学と京都大学の試験日が重なってしまい、悩んだ結果、東京大学へ進学することにしました。そして、いまの研究をするならばKEKが最も進んでいると思い就職しました」

—研究をやっていて一番印象に残っていることは何ですか。

「益川さんと小林さんがノーベル物理学賞を受賞したことです。ほかの研究員に反対されながらも研究を続けて、20年以上の歳月をかけて実を結んだので、これ以上に印象に残ったことはありません」

—ありがとうございました。